

第九章 羅先へ

「梅、いよいよ赤紙来ちまったぞお。」

「モレさ、そりやめでたいことじゃあねえの。」

守礼都徒郎(もれとどうろう)の元に郵便配達員が召集令状を届けに来た。今まで何人も送り出してきたので、やがて自分にも回ってくるだろうと思っていたが、いざ召集令状が届いてみると心境は複雑だった。

「ちよつとそこらおろおろつて(うろうろして)、枘谷さんとこさ行つてくる。」

自転車に乗り赤紙を懐にツバサ広業に向かった。

幕末や戦中のことにかけてはコツコツと勉強していたが、まさか自分がこんな小説に御出陣とは思っていなかったので油断していた。

「いよいよ来ちまっただか。だば、タスキと横断幕さ作るべ。みんなねぐなつちやつたなあ。」

「んだなあ。伊藤さんは南方に行つてしまったスし、山本先生は軍医サ行つちまったスし、

小野サは？」

「無事のご帰還。今日は柳葉サと松村サと一緒に川反で祝いの芸者遊びしてるだ。」

「んだかあ。そりやえがった。」

「おめさんは元々阿仁マタギのもんだべ。鉄砲さ自信あんだべ。」

「熊つこなば撃つたことあるけど、人はまだ撃つたことはねえ。」

熊猟と言うと腕利きの猟師が遠くからライフルで撃つように思われがちだが、冬の熊猟は無雪期に目を付けておいた岩穴や木のウロと呼ばれる穴に、煙を流し込んで出てきた熊の口の中に鉄砲の筒先突っ込んでドーンと引き金を引くので、あまり射撃の腕は必要とされない。むしろ度胸勝負。熊も前足が穴から出てしまうと動きが早いので、それまでは意外とゆつくり穴から顔を出すもんです。

ツバサ広業の帰りに総社神社に立ち寄つて、隣の造り酒屋で清酒高清水を一升買って家に戻った。

「モレさあ、どこさいつてただあ。べつこ(牛)の肉サもらつたから鍋にしべ。」

「んだなあ。」

モレさんは秋田歩兵第十七連隊で訓練を受け、補充要因として抗日パルチザン掃討のため牡丹江に近い掖河(えきが)第126師団に配属されることとなった。

敵方に情報を流す共産主義者が暗躍しているので出港の日取りは伏せられていたが、予定されていた日時より四日早く船が出ることになった。これも少ない護衛で輸送船を無事に届けるためである。

出発前の一時帰宅で、写真館の整理をした。

「俺にもしものことがあつても、靖国神社サいるから会いに来てくれ。」

「ほつたら遠いべし簡単に行けねえだべ。」

「だば、高清水の護国神社ならどうだべ？」

「そこまで帰つてくるなら、家まで帰つてきなつせ。」

「んだなあ。」

梅さんは守礼都徒郎が少しでも気持ちを楽しませて赴けるよう言葉を選んでくらし。

「おらあ何が重要なことごと忘れてる気がすんだ。」

「なば、思い出したら手紙サける。忘れてたんだば、気にさせねでけれ。」

梅さんは祝言を上げていないことを言い出せないのだろうと思っていた。だから赤紙が届いた日に総社神社行つて、そのことを神主さんと相談してきたのではなからうか？と察していた。実際は送別会の飲み会の相談に行っただけだったのだが、物事は良い方に、樂觀的にとらえておくに越したことはない。

補充兵は函館から来た輸送船に乗り、今の北朝鮮の北東、ロシア国境に近い羅先(ラジン)の港に直行する。日ソ不可侵条約が締結されていたとはいえ、どう猛な犬のような国だから領海は危険が多い。慎重を期しての航海が要求された。

佐世保から小倉、境港、舞鶴、新潟、鶴岡と北前船のルートをたどつて補充要員を乗せてきた民間チャーターの輸送船「左前丸」はすでに秋田港に到着しており、羅先に向かう輸送船へ兵隊たちが乗り変えていた。

「御武運をお祈りします。」

和心さんと息子さんがおむすびと郷土の英雄である桜田淳子のブロマイド写真を持って見送りに来てくれた。

「梅のことサ、ひとつよろしく面倒見てやってけれ。」

「なあんもだ。心配ねえべさ。手柄立ててけらっしやい。」

”祝！守礼都徒郎君 出陣！提供 ツバサ広業”の横断幕が風になびき枡谷社長を先頭に、仲間たちと川反の芸者衆が見送りに来てくれた。

フィリピン戦線から帰還したばかりの小野さんが自慢ののどを振るわせて唄う「海ゆかば」を皆で大合唱する中、モレさんは船上の人となった。

二隻の護衛船に守られて羅先に向かう船はゆつくりと動き出した。

右手に見えていた男鹿半島がもうすぐ後ろに見える頃、モレさんは何か引つかかっていた重要なことを思い出した。

「ここは地元秋田なのになんであの人は出て来ねえんだべか？」

「いい湯だなあ〜！」

連日の全力疾走と水泳で酷使した体を休めるため、男鹿温泉で風呂に入りながら港を出る船を眺めている秋田のネロさんだった。

輸送船の中は日本各地から集められていた兵隊なので、様々な方言が飛び交っており、モレさんは国際派になったみたいでハッピーでナウな気分だった。

「きさん(貴様)！そぎゃん簡単なことばまだできんとか！歯を食いしばれ！」

鉄拳制裁が飛び交う場面に出くわした。勇猛果敢と評判の熊本連隊か。なるほど、こりや厳しい。とモレさんは黙つてみていたが、三発四発と殴るうちに、殴っていた上官の方が手を痛めたらしく、

「今日はこんくらいにしたる。明日までに憶えておけ！」

と出て行った。殴られた二等兵は痛がる様子もなく、ひょうひょうと荷物を整理していた。モレさんの寢床はその男の相向かいになったため、騒がしい夜になるのかな？と、上官の目を気にしながらこの二等兵が鉄拳制裁を受ける要因となった軍靴のしまい方を手伝ってやった。

「ほんなごつお世話になって申し訳なか。」

「なあんもだ。それよりあんた、あつたにごしゃがれて(殴られて)怪我はないだか？」

「いつもんことすばい。自分は不器用な人間なので。」

こいつ、気分は高倉健だな！とモレさんは思った。

「うちやあ、阿保野論気(あほのろんげ)と申す、しがな二等兵で初年兵ですばい。」

「わあも同じ初年兵だ。秋田の守礼都徒郎と言います。写真館サやってみました。」

「うちやあ、失業者を営んどりました。軍隊はよかところです。飯には困らん。ちよつとばつしい殴られても、飯には困らん。」

こういうご時世だ、こんな兵隊が出て来るものやむを得んだろうとモレさんは思った。

出向する前に和心さんにもらったむすび飯のことを思い出したモレさんは、背囊(リュックのことです)の中から二つほど取り出して阿保野論気に与えた。

「秋田の米です。」

こつそり布団の中に潜って食べるものだろうと思っていたら、阿保野論気はその場で大胆に二つを平らげてしまった。

「こりやあ、旨か米ですばい。こんた旨か米、初めてですばい。軍隊入つてよかつたあ。」

「熊本連隊は何処さ着任すんだべか？」

「なんも教えてくれんばつてんがあ、わからんとです。ばつてん、知つたところでそこが何処なんかもわしやわからん。たらふく飯ば食べられればわしや幸せばい。」

そうだろうな。この男ならそうだろうな。何となく鉄拳制裁を加えた上官の気持ちもわかるようになったモレさんだった。

ソビエトを刺激せぬよう輸送船は朝鮮半島を左に見ながら北上した。羅先に到着した時には夕方になっていたが、わずか一昼夜で来られる距離に危険な異国が存在していることを守礼都徒郎は脅威に感じた。

羅先の港に到着すると、各連隊ごとに向かう先が違うので、阿保野論気とも別れる時が来た。

「モレどん。道中いろいろお世話になり申したばい。本当に感謝しておりますばい。」

「阿保野二等兵もご無事で、弾ツコは前からばかり飛んでくるとは限らん。」

部隊でいじめられている阿保野論気に、いざ戦場になったら後ろから飛んで来た弾に当たる人もいると言う意味だった。

実際、無駄に威張り散らす上官を背後から味方が撃つ例もしばしば存在した。実戦に誤射があつても不思議ではない。

前線の先頭に立つて「撃て！」と声をかけるのはおおむねこうした威勢だけ良い下士官だったので、日ごろ威張られている部下にとつては格好の餌食になっていた。

現代の社会もそうだが、人を粗末にするとその報いはとんでもないところで要求されるものです。

モレさんたち満州に向かう部隊は羅先の宿で一泊して、翌朝軍用トラックで北に向かうことになっていった。その晩は息抜きの自由行動がとれる最後の時だったので、皆軍票を手に夜の街に繰り出していった。

モレさんは居酒屋で魚を食べながら酒を飲んでいた。満州の内陸に入ってしまったえば日頃親しんでいた海の物など縁がなくなってしまうだろうと、焼き魚の味をかみしめていた。

「やっぱり酒は秋田だべさ。」

朝鮮で飲む日本酒はキレがなく曇った味に思えた。

店の奥に中国人と思われる男が二人の汚い姿をした娘を連れているのが見えた。娘たちは肩をすばませ泣いていた。何やら中国語で怒鳴りつけながら娘たちを殴っていた。

やがて女将と思われるひよつと二顔の朝鮮人の女が入ってくると、娘たちを品定めするように眺め、朝鮮語で、あらを見つけては難癖つけ値段交渉をした。値段が決まると、中国人の男に札の束を渡した。男はその札を数え終わると「謝謝」と店を出て行った。

牛や馬を売り買いする馬喰(ばくろう)だつてもう少し気を配った丁寧な扱いをするもんだとモレさんは憤怒した。

盃を口に運びながらモレさんは想像した。

多分この女は慰安所の女将。汚い身なりの娘たちは買われてきた娘たちだろう。そうすると、あの中国人は女衛(ぜげん ※人買い)か？

まあ、よくあることだ。

東北地方には何年かに一度春から夏にかけてやませという冷たい風が吹く。

寒流の親潮の上を通過した冷えた風が陸地に上がり、霧の多い日照の少ない夏をもたらす。

ひどかったのは昭和七年の大凶作の年で、寒村から多くの娘たちが人買いに買われていくことで食いつないだ。いわゆる東北大凶作の年である。

奥羽山脈のふもとの山間地で育ったモレさんも、娘が女衛に連れられて山を下りて行く光景を幾度となく目にしてきた。

昭和四年十月二十四日にアメリカカウオル街で株の暴落が始まり、週明け二十八日の月曜に壊滅的な大暴落が起き世界経済が混乱に巻き込まれていく、いわゆるブラックマンデーが起こる。

アメリカはニューデール政策、フランス、英国は自国の植民地との貿易を強化するブロック経済、第一次大戦廃線による法外な賠償金に苦しむドイツはナチスの台頭を招いた。日本は金輸出や兌換の解禁をしたが、ことごとく政策は失敗してしまう。英仏の植民地が多かったアジアも列強による搾取が相次ぎ、独立のためにも日本の支援を必要とする時代が来ることになったのだ。

併合された朝鮮半島の人間には、こうしたアジアへの責任感を持って行動する人間が非常に少なかった。二千年に及ぶ中国との隷属関係で奴隷精神が定着してしまったがために、魯迅が言うところの中国人の悪癖「阿Q精神」がすっかり染み付いてしまったのがこの人た

ちなんだろうとモレさんは思った。

朝鮮語はわからなかったが、女将と思われる女の不遜な態度が、人情のかけらもなく、まるで家畜以下の生き物を扱うような態度に、日本人とは異なる感覚だと思った。女将は憲兵の目を気にしてか、裏口から娘二人の襟首をつかんで出て行った。

この女郎屋の女将、コミンテルンの息のかかった趙春花と言う朝鮮人で、瑞穂と名乗って日本でも破壊活動を後押しするゲリラであった。

翌朝、満州との国境近くまで軍用トラックで運ばれたモレさんたちは、そこで野営して行軍で山を越えることとなった。抗日。ルチザンが何処に出没するかわからないので、徒歩で山を越えて満州に入り、そこから関東軍の軍用トラックで現地入りすることになっていた。

その頃、秋田の川反の料亭の二階では出陣したモレさんを取り巻く人たちが胸に青いリボンをつけて集まっていた。

本当はモレさんが出陣する前に開く会だったのだが、予定よりも四日早く輸送船が出てしまったものだから、”とりあえず本人抜きでもしようがないわな”と。送る会は予定通りに決行されたのだった。

モレさんがいないならと、芸者衆も呼んだ。

”祝 守礼都徒郎君を送る会！提供 ツバサ広業”の横断幕の「送る」の部分に「偲ぶ」と書かれた半紙が張られていた。

近衛連隊で少尉として任務を全うしてきた松村氏が司会になり、枡谷社長のあいさつの後、総社神社神主さんによる乾杯のあいさつで地獄の飲み会が始まった。

フィリピン戦線から無事帰還した小野さんは、フィリピンでの武勇伝を語り、フィリピン調の海ゆかばを歌って自慢ののどを披露した。

南方戦線にいる海軍の伊藤さんからは

「モレクンノシユツジン、ココロカラオイワイモウシアゲマス。カオリサンニアイタイ。アカグミガンバレ。ナンキョクチュウトンタイ イトウスケヤス。」

と。ペンギンさんのイラスト入り電報が入った。破竹の勢いで南進した伊藤さんは南極までたどり着いたようだ。

こうして、秋田の夜も更けていくのであった。